

# 八重らんしよ

平成25年大河ドラマ「八重の桜」をもっと楽しむために

完全保存版



「八重の桜」をもっと楽しむために

# 八重らんしょ

完全  
保存版

## 目次

2	福島県知事あいさつ	45	八重が学んだ「精神」
4	はじめに 大河ドラマ「八重の桜」とは		飯盛山／殉難烈婦碑／白虎隊記念館／ 会津家訓十五箇条／会津藩松平家墓所／ 郡長政の墓／土津神社／伊佐須美神社／ 会津三縁起／会津漆器／御薬園／ 茶室麟閣／会津磐梯山／猪苗代湖／ 慧日寺／福満虚空像尊圓藏寺／ 会津ころり三観音／田中玄宰／ 會津藩校日新館／稽古堂／秋月胤永／ 海老名リン／野口英世
6	特集 八重の生涯 概要・年表／幼少期／戊辰戦争／ 米沢、京都へ／襄との結婚／ 襄没後の半生	62	読まんしょコラム④ 仏都会津
18	読まんしょコラム① 新島八重の生き方から学ぶもの	63	八重の人生を変えた戊辰戦争の「足跡」
19	八重をとりまく「人物紹介」 新島襄／山本覚馬／山本佐久／山本権八／ 山本三郎／川崎尚之助／伊東悌次郎／ 飯沼貞吉／松平容保／孝明天皇／松平慶喜／ 齋藤一／近藤勇／土方歳三／榎村正直／ 熊本バンド／圓能齋鉄中		奥羽越列藩同盟／ 小峰城(白河城)と白河口の戦い／ 棚倉藩の戊辰戦争／大壇口の戦い／ 霞ヶ城(二本松城)と二本松少年隊／ 無血開城を果たした三春藩／母成峠の戦い／ 亀ヶ城／旧滝沢本陣／十六橋の戦い／ 戸ノ口原の戦い／一ノ堰の戦い／長命寺／ 諏方神社／小田山／中野竹子殉節之地碑／ 佐川官兵衛／甲賀町口郭門跡／ 鶴ヶ城籠城戦／会津戊辰戦争集結の地／ 妙国寺／河井継之助／善龍寺／会津唐人風
30	読まんしょコラム② 会津の女は強い!!	85	読まんしょコラム⑤ 新兵器vs旧兵器
33	八重が生まれた「時代」 会津武家屋敷／さぎえ堂／大内宿／ 新宮熊野神社／東山温泉／白水阿弥陀堂／ 向羽黒山城跡／福島県立博物館／ 塔のへつり／南湖公園／三春滝桜／五色沼／ こづゆ／棒たら／にしんの山椒漬け／ 会津木綿／相馬野馬追／会津田島祇園祭／ 七日堂裸詣り／十日市	86	マスコットキャラクターについて
44	読まんしょコラム③ 会津の食	87	参考文献・編集後記



### 福島県知事あいさつ

2013年の大河ドラマ「八重の桜」では、本県に生を受け、幕末から明治、大正、昭和と激動の時代を力強く生き抜いた新島八重の生涯を描きます。

大河ドラマの放送を前に、本書により「幕末のジャンヌダルク」「ハンサムウーマン」「日本のナイチンゲール」などと称された八重の生涯や心に触れていただければ幸いです。

東日本大震災という未曾有の大災害に見舞われ、厳しい復興の道を歩む本県にとって、八重の生き方は希望と勇気を与えてくれるはずで、す。「八重の桜」の放送開始に合わせ、本県の元氣や魅力を全国に向けて力強く発信してまいりたいと考えておりますので、本書を手にとつていただいた皆さんの御協力をお願いいたします。

福島県知事 佐藤雄平

平成25年(2013年)大河ドラマ

# 「八重の桜」とは？

2013年の大河ドラマは「八重の桜」。

京都府にある名門・同志社大学を設立した新島襄の妻・八重の生涯を描きます。

主人公・新島八重を綾瀬はるかさんが演じます。

脚本を手がける山本むつみさんは、次のようにコメントしています。

「大きな破壊の後に、より良い世界を作り出そうと立ち上がる人たちの言葉は、幕末の動乱ですべてを無くしたところから、

新しい世界へと踏み出した人々の魂と、響き合うような気がします。

だから、これは歴史の彼方に眠る過去の話ではなく、

今を生きる私たちが共有できる、現在の物語になりうると思うのです」

地震、津波、原発事故、そして風評被害。

私たちの住む福島県は、東日本大震災で多くの苦しみを受けました。

そして残念なことに、その苦しみはまだ終わっていません。

そう、だからこそ、まさにこの今。

幾度となく逆境に立たされながらも自らの誇りと意思を信じ、

力強くエネルギーに生きた八重の生涯をたどることは、

私たちに必要な「なにか」を教えてくれるに違いありません。

特集

# 八重の生涯

幕末、明治、大正、昭和……。時代の波に翻弄されながらも、会津人としての誇りを忘れなかった八重。自分の意志を貫いた人生とは、どんなものだったのでしょうか。

## 三つ子の魂百まで 会津人の誇りを胸に生きる

ふるさとが戊辰戦争で敗れ、兄・覚馬を頼って京都へ行っても、その心の奥底には、生涯を通して会津人としての誇りが息づいていました。それは藩祖・保科正之が定めた「会津家訓十五カ条」や「什」とよばれる会津藩士の子どもたちで構成されるグループで訓示される「什の掟」などに代表される、「会津藩士としての心構え」を幼いころから教え込まれていたところにあります。八重は女性なので「什」に加わることはできませんで

したが、兄・覚馬や弟・三郎たちが日々の暮らしで実践しているのを見て育ち、その教えは八重にも伝わっていました。  
明治4(1871)年、覚馬を頼り、母の佐久、姪の峰と共に京都へ移り住みます。そこでキリスト教に入信し、さらにアメリカ帰りの襄と結婚します。京都は排他的な土地で、よそからやって来た人たちはどこかよそよそしい態度をとっていました。それに対し毅然とした態度をとる八重を、襄は「生き方がハンサム」と称しました。  
襄亡き後は、篤志看護婦として活躍します。戊辰戦争での体験やキリスト教の教えから、傷つき弱っている人を助ける、奉仕活動に勤しみました。



和装の八重  
写真提供/同志社大学

## 新島八重略年表

● 弘化2年 (1845年)	会津藩(現在の会津若松市)で父・山本権八、母・佐久の間に生まれる。	● 明治2年 (1869年)	覚馬が京都府の顧問に就任。
● 嘉永6年 (1853年)	黒船来航。	● 明治3年 (1870年)	斗南への移住が始まる。
● 慶応元年 (1865年)	川崎尚之助と結婚するも、戊辰戦争後に離縁。	● 明治4年 (1871年)	覚馬を頼って、母・佐久、姪・峰と共に京都へ。
● 慶応3年 (1867年)	大政奉還。	● 明治5年 (1872年)	女紅場に権舎長兼教道試補として就職。
● 慶応4年 「明治元年」 (1868年)	戊辰戦争が始まる。	● 明治8年 (1875年)	新島襄と婚約。女紅場教員を解雇される。 同志社英学校開校。
		● 明治9年 (1876年)	洗礼を受け、襄とクリスチャンの結婚式を行う(京都初)。襄32歳、八重30歳。
		● 明治11年 (1878年)	同志社女学校開校。母・佐久が同校の舎監就任。
		● 明治12年 (1879年)	覚馬が京都府議会初代議長に就任。
		● 明治20年 (1887年)	同志社病院開院。同時に京都看護婦学校開校。
		● 明治23年 (1890年)	夫・襄が大磯で永眠(46)。襄の死去に伴い、覚馬が同志社臨時総長に就任。 日本赤十字社正社員になる。以後奉仕活動に勤む。
		● 明治25年 (1892年)	兄・覚馬永眠(65)。
		● 明治26年 (1893年)	松平容保永眠(59)。
		● 明治28年 (1895年)	日清戦争にて篤志看護婦として従軍(広島)。
		● 明治29年 (1896年)	母・佐久永眠(86)。 日清戦争での功勞に対し、勲七等宝冠章が贈られる。
		● 明治38年 (1905年)	日露戦争にて篤志看護婦として従軍(大坂)。
		● 明治39年 (1906年)	日露戦争での功勞に対し、勲六等宝冠章が贈られる。
		● 昭和3年 (1928年)	松平容保の孫・勢津子、秩父宮家へ入興。八重、お祝いのため上京。
		● 昭和6年 (1931年)	大龍寺に山本家の墓を建てる。
		● 昭和7年 (1932年)	急性胆のう炎のため自宅で永眠(87)。
		● 平成元年 (1989年)	会津若松市・米代に覚馬、八重生誕の地碑が建立される。

# 会津若松での 八重 〜戊辰戦争 以前〜

「幕末のジャンヌ・ダルク」そして「ハンサム・ウーマン」とも称された八重。彼女のルーツを探っていくと、会津若松での生活にたどり着きます。そこには、後の「新島八重」を形成する上での重要な要素が残されていました。

## 活発で 性格は男まさり 四斗俵を上げ下げした力持ち

嘉永6(1853)年、黒船の来航により事実上の開国に追い込まれ、幕府の権力が徐々に失われつつあった江戸時代末期。そこからさかのぼること8年前の弘化2(1845)年、新島八重は会津藩の砲術師範であった山本権八・佐久夫妻の子とし

て、城下の米代(現在の会津若松市米代)に生まれました。彼女が生まれた場所には生誕地碑が建てられています。

小さなころからとても活発で、男まさりな性格だった八重。非常に力持ちで、彼女が12歳のころ、四斗俵(約60kg)を肩まで4回も上げ下げしたというエピソードが残っています。



会津若松市米代にある生誕地碑

## 幼なじみの祖母から

### 裁縫の手ほどきを受ける一面も

八重が生まれた当時、女性の武術といえば「なぎなた」が一般的で、對抗試合なども行われていました。でも、そこは砲術藩士の家に生まれた八重。幼いころから砲術に興味を示し、砲術師範で藩校日新館の教授を勤めた兄・覚馬から手ほどき

を受けます。しかし、八重も女の子。砲術ばかりを教わっていたわけではありません。

籠城戦の際、八重の髪を切ったといわれる幼なじみの高木時尾。八重は、近くに住む時尾の祖母から裁縫を習っていました。通常は、自分の祖母や母親から裁縫を習うものですが、時尾の祖母は、近所でも評判になるほどの腕前でした。八重はもちろん、幼なじみの日向ユキも一緒に時尾の祖母の元へ通い、裁縫の手ほどきを受けていました。

男まさりな部分ばかりがクローズアップされる八重ですが、こういった女性らしさも持ちあわせていたのです。



八重手製の刺しゅう額 写真提供/同志社大学



## 白虎隊士・伊東悌次郎に 鉄砲の撃ち方を指南

八重が住んでいた武家屋敷街は、内堀と外堀に囲まれた「郭内」にありました。郭内の東西に走る道は「丁」とよばれていました。一方、南北に走る道は「通り」とよばれ、行き先の町や寺社の名前がつけられていました。

山本家があった米代は鶴ヶ城の西側に位置していました。東隣にあったのは、白虎隊士・伊東悌次郎の家。悌次郎は、八重の家で鉄砲の撃ち方を習っていました。ほかにも、八重と一緒に籠城した幼なじみの高木時尾、時尾の祖母と一緒に裁縫を習っていた日向ユキも、近所に住んでいました。

# 戊辰戦争と八重



帯刀姿の八重  
写真提供/  
同志社大学

八重の人生をひもとく上で、避けて通れない戊辰戦争。ふるさと・会津では数々の激戦が繰り広げられ、八重はたくさんのもを失いました。

## 主君のため亡き弟・三郎のため 籠城戦に挑んだ八重

八重の人生のターニングポイントのひとつとして、戊辰戦争があります。鶴ヶ城での籠城戦は八重が深く関わった戦いでした。

籠城戦の開始は、新政府軍が城下に侵入した慶応4(1868)年8月23日の朝。城下の婦女子は、敵の襲来時、鐘の音を合図に三の丸に集合して、そこから入ることになっていました。

鐘が鳴った当時、城へ向かうつもりだった八重に対して、母・佐久は他に避難するつもりでした。というのも、女性は足手まといになりそこで食糧をいただくことは不忠になる、と考えていたからです。しかし、そこに「城内での女手が足りない」との知らせが届きます。

主君のため、そして鳥羽・伏見の戦いでを負傷が原因で亡くなった弟・三郎のため、八重と佐久は一緒に入城して戦うことを決意しました。

東の小田山に砲台を設け、天守閣に向けて砲弾の雨を降らせませす。負けじと八重も最初の夫・川崎尚之助らと共に、城南の砲台から砲弾を打ち返しました。

また新政府軍から打ち込まれた砲弾に、当時最新とされた四斤砲よんきんぱうがありました。破裂すると5〜10cm四方の破片となつて飛散し、多くの人々を殺傷する兵器です。不発弾を分解し、藩主・松平容保かたもりに構造を説明したのが八重でした。その博識には、容保も感心するほどだったといわれています。

そのような数々の勇名だけではなく、女性として兵糧炊きや弾丸製造、負傷者の手当などにも努めました。

## 生まれ育った会津が負けた…

増え続ける戦死者と負傷者に心を痛めた容保は、これ以上犠牲者を出さないために降伏を決意。その意思を城内の者たちに伝えました。そして、慶応4(1868)年9月22日、会津藩は北追手門前に「降伏」の旗

をたてたのです。

この前日、八重は最後の夜を過ごした三の丸の土蔵の白壁にこう刻みしました。

「明日の夜は  
いづこの誰か 眺むらん  
なれしお城に 残す月影」

戦争に負けたことに対する、当時の八重の心情が伝わってくる詩です。

## 「幕末のジャンヌ・ダルク」

兄・寛馬は京都で二時囚われの身になったもの生きていましたが、八重たちには死んだと伝えられていました。また、弟・三郎だけでなく、父・権八も一ノ堰で戦死しています。八重は戊辰戦争でたくさんものものを失いました。帰る家も、もちろんありません。

身も心も会津にささげ、戦った八重。会津藩を勝利に導くことはできませんでしたが、その働きは「幕末のジャンヌ・ダルク」と後世に語り継がれるほどだったのです。

## 銃や大砲を駆使して 男性顔負けの大活躍！

八重はこの籠城戦において髪を切り、鳥羽・伏見の戦いで負傷し江

戸で亡くなった弟・三郎の袴を身にまとい、男装。女性ながら銃を持って戦い、夜襲にも参加しました。そして、八重が番の輝きを放つのは、やはり砲撃戦の時。籠城戦開始から数日後、新政府軍は鶴ヶ城南

は、やはり砲撃戦の時。籠城戦開始から数日後、新政府軍は鶴ヶ城南



入城時の八重。堂々とした面持ちから、自信がうかがえる

会津武家屋敷所蔵・長谷川恵一画

# 米沢、 そして京都へ

髪を切り男装して、主君のため、家族のため、会津女性の誇りをかけて戦った八重でしたが、会津藩は無念の降伏。開城後の失意の中、八重は生きる場所を求め米沢、そして京都へと向かいます。

## 会津戦争終結

1カ月におよんだ籠城戦の後、ついに会津藩は降伏します。60歳以上の老人、14歳以下の男子、そして婦女子は罪を許されましたが、それ以外の藩士たちは猪苗代に護送

され、その後、東京と越後高田で謹慎の身となりました。このとき男装していた八重は戦死した弟の山本三郎と称して、他の藩士たちと三緒に猪苗代まで行こうとしますが、途中、女であることがばれて釈放されています。焼け野原となった城下に住むところはなく、会津に残された

人たちは、喜多方や塩川周辺の農家に移り住みます。八重をはじめとする山本家もその中にいました。そこで八重は、農作業の手伝い、近所の子供たちに読み書きを教えながら生活をしていたようですが、どこに住んでいたかは、はっきりしていません。

## 新事実 米沢へ出稼ぎ

これまで、八重は京都に行く以前、会津で暮らしていたとされてきましたが、最近行われた調査で、戊辰戦争後、米沢へ出稼ぎに行っていたことが判明します。会津図書館に



女紅場跡碑(京都市上京区)

であるうらは、会津に残る道を選び、離縁することになりました。1年余りの米沢の生活は生計の見通しがたらず、厳しいものでしたが、会津に戻ろうとしても、そこは焼け野原。京都を選んだのは、未知の世界へ向かっていく勇氣を持ち続けた八重ならではの決断だったのかもしれない。

藩命により京都に入っていました。その後の鳥羽・伏見の戦いの際に薩摩藩に捕まり幽閉されていました。幽閉中に作成した「管見」という建白書によって、覚馬は京都府大参事の川田景与の推薦で京都府の仕事をすることになりました。

躍。京都に移り住んだ八重は、覚馬の影響で英語を学ぶようになり、洋装、洋髪の女性に生まれ変わります。明治5(1872)年には、女性の教育施設である「女紅場」の教員になり、女子に裁縫や作法、読み書きなどを教え、京都府から給料をもらっていました。当時としては珍しい積極的に働く女性で、今でもキャリア・ウーマンのはしりです。

## 兄の覚馬を頼り京都へ

八重の兄である山本覚馬は、藩主の松平容保が京都守護職に就任した2年後の元治元(1864)年、

残されていた旧北会津郡の戸籍から、八重の戸籍が発見されたのです。それによると、米沢藩士の内藤新一郎方に一族4人が身を寄せて出稼ぎしているとあります。しかも、この中で八重の身分は「川崎尚之助妻」のままでした。また、八重の最初の夫である川崎尚之助が、会津藩士であった記録も発見されました。米沢で生活していた八重のもとに、鳥羽・伏見の戦いで戦死したと思われる兄の覚馬が、京都で生きていくとの知らせが届きます。そこで、明治4(1871)年10月、兄を頼りに、母の佐久、姪のみねと3人で京都に向かいます。覚馬の妻



正装した八重  
写真提供/同志社大学

八重と女学校の生徒たち



写真提供/同志社大学

# 襄との結婚

常に寄り添い、互いに支えあっていた八重と襄。  
八重が後に『私のライフは、襄のライフ』と言っていたほど、  
2人の間には、深い絆が芽ばえていました。

## 2人のなれ初め

八重と襄が初めて出会ったのは、明治8（1875）年4月ごろ。京都の宣教師・ゴードンの家の玄関先でした。ある日、八重が聖書を習うためにゴードンの家に行くと、同じく彼を訪れていた襄が玄関で靴を磨いていました。八重はゴードン付の下

男かと思つて、あいさつもせず素通りしたといいます。その後、ゴードン夫人が八重に襄を紹介。それをきっかけに、2人の交流が始まります。この時はまだ、お互いに意識しあうことはなかったようですが、後に襄は「真に偶然に、というより奇跡的に出会った」と話していたそうです。

## 井戸の上の八重に恋した襄

2人のキューピッドとなったのは、事実上の京都府知事だった榎村正直まきむらまさな参事官。彼はキリスト教の教えに基づいた学校設立のため、襄と話し合いを重ねていました。さらに、女紅場こまばへの援助を求めにきていた八重とも、面識がありました。話し合いの合間に、榎村と襄は結婚について話をします。「夫に従うだけの妻は



結婚当時の八重と襄  
写真提供／同志社大学

「ご免だ」という襄に、榎村は「それならふさわしい人物がいる」と八重を薦めました。この時から、襄は八重のことを意識するようになったといわれています。

八重が襄の心を射止めたのは、夏のある暑い日。暑さに耐えかねた八重は、自宅の中庭に出て、板戸を置いた井戸の上で縫い物をしていました。覚馬を訪ねてやってきた襄はそれを見て驚き「妹さんに注意したらどうか」と覚馬に忠告しますが、覚

わりにダイニング・キッチンを設置。当時としては画期的なセントラル・ヒーティングが導入されました。キッチンの窓からは、庭の梅が見られるようになっていたり、低いベッドを用意されたりするなど、洋式の生活に慣れていない八重への気配りが随所に散りばめられています。

八重と襄はお互いを認め合い、尊重しあっていました。そんな2人のスタイルは「男女共同一致」。散歩するときはいつも「緒で、人力車を相乗りしたり、学校のチャペルで並んで座ったりするなど、とても仲のよい夫婦でした。

「汝」に別れを告げられないのが辛い」と答えたそうです。その後、八重の献身的な看病もむなしく、明治23（1890）年1月23日、襄は「グッドバイ、また会わん」と言い残し、八重の腕の中で、その生涯を終えました。

後に八重は「私のライフは、襄のライフ」といっています。わずか14年の夫婦生活でしたが、常に寄り添い、支えあってきた2人の間には、深い絆が育まれていたのです。

めに集まった人は、同志社の生徒たち、八重や覚馬の友人など、40人ほどでした。質素な式で、当日の料理は、八重手作りのクッキーだったといえます。このような式にしたのは、襄の儉約志向だけではなく「市民の反キリスト教感情を刺激したくない」という思いがあったからなのかもしれません。

## 2人の結婚生活

明治11（1878）年9月、2人の新居（現在の新島旧邸）が完成。邸内はフロアリングで、洋風の居間にはテーブルや椅子が並び、土間の代



新島旧邸応接間

写真提供／同志社大学

## 襄との別れ

明治21（1888）年、八重は医師から呼ばれ、襄の余命が残りわずかであると告げられます。気丈なことでは知られている八重ですが、この時ばかりは涙が止まらなかつたといわれています。襄は、八重から自分の命が残り短いことを知らされると「自分はすでに神に身をささげているから、いつ召されてもかまわない。ただ、それが突然死なら、『最愛の

## 日本初 キリスト教式の結婚式

2人が婚約した年の11月29日、同志社英学校が開校。翌年の1月2日に、八重は京都で始めて洗礼を受け、翌日、宣教師・デイヴィスの進行で結婚式を挙げます。襄32歳、八重30歳でした。

八重はお手製のドレス姿。八重がいつから洋装したのかはわかっていませんが、同志社の生徒たちは「靴を履き、ドレスをまとった日本人女性を見るのは、これが初めて」と話しています。

クリスチャン夫妻の誕生を祝うた

新島旧邸外観 写真提供／同志社大学



# 裏没後の半生

〜看護と茶道  
そして禅の教え〜

裏を亡くした後、ほかに何か社会に貢献できないかを考えた八重は、看護とお茶の道へと進みます。そして晩年は、仏教の教えにも触れていきました。

## 従軍看護の道へ

明治26(1893)年、京都に日赤篤志看護婦人会が設立されると、八重はいち早く会員として参加します。篤志看護婦人会とは、皇族や華族の夫人が参加して組織された会です。ボランティアナースなので、無償での奉仕でした。翌年の日清戦争では篤志看護婦として傷病兵の看護に従事し、その功績が認められ、明治政府から勲七等の勲章を授けられます。さらに明治38(1905)年にも、日露戦争の篤志看護婦として勲六等の勲章を授けられています。籠城戦で怪我人の世話を



篤志看護婦姿の八重  
写真提供/同志社大学

した経験も、八重の看護に対する思いを作り出したひとつの要因だと考えられます。

また、八重は、女紅場(後の京都府立鴨沂高等学校)で出会ったと思われる茶道を、女子の職業としていかせないかと注目していました。しかし、八重が茶道裏千家の門をたたいたのは、裏の死から4年後の明治27(1894)年のことです。日清戦争に向かっていた世の中では、看護に従事することのほうが優先されていたのです。

## 茶道家としての八重 「新島宗竹」

戦争が落ち着くと、八重は茶道にも精進するようになります。そこには、維新後の荒廃した女性教育を立て直そうとした八重の思いが感じ取れます。

八重の祖先・山本道珍は、会津藩主・保科正之に仕えた藩の茶道頭です。道珍は遠州流茶道を学んでおり、会津の茶道の祖となりました。八重は兄・覚馬の推薦で、女紅

場に勤務しました。ここに茶道教授として勤務していたのが、裏千家十三世・圓能斎鉄中の母。これがきっかけで茶道に親しむようになったといわれています。

夫・新島裏が亡くなった後は、圓能斎直門の茶道家として茶道教授の資格を取得。茶名「新島宗竹」を授かりました。以後は、京都に女性

向けの茶道教室を開いて、裏千家流を広めることに貢献しました。

自宅(新島旧邸)の洋間のひとつを茶室に改装するほどお茶の道に通じた八重。その茶室は、家元から「寂中庵」と命名してもらいました。茶室の名にある「寂」という文字は、「どんな時でも動じない心」とも解釈されています。潔くどっしり構

えた八重には、ふさわしい命名だったのではないのでしょうか。

## 禅の世界に 触れる八重

晩年は禅にも興味を示し、臨済宗建仁寺を訪れます。しかし、茶道を通して知り合った管長の竹田黙雷は、指導を仰ぎたいという八重の申し出に、「あなたはキリスト教で固まっているから、教えることは何もない。ただ、『遊び』

にいらっしゃい」と答えます。それから、和尚と茶事を楽しむ日々を過ごし、仏教の教えをも聞き習ったといわれています。

キリスト教徒である八重は「ひとつの宗教に身を置いているからといって、他の宗教の方のお話を聞いてはいけない、ということはないでしょう」といつていました。この度量の広さ、柔軟さこそ八重の真骨頂なのでしょう。

## 最後の最後まで

会津で生まれた八重にとって、裏亡き京都での生活は寂しいものでした。しかし、看護や茶道、和尚との出会いの中で、八重は充実した半生を送ったのではないのでしょうか。最後は胆のうと十二指腸を患い亡くなりますが、亡くなる前日にもお茶会に参加したというから驚きです。

八重の葬儀は同志社葬として学内で行われ、多くの人に見送られました。現在は京都の同志社墓地に、夫の裏と安らかに眠っています。



新島旧邸にある茶室「寂中庵」

写真提供/同志社大学